

を再び引用する。

A: 主体の持っている問題とは、…(中略:引用者)主体が、自分自身を立て直そう(変化させよう)とすると同時に、外界に働きかけてこれを変化させようとする力動的な事態の中で、主体自身が抵抗を感じ、これを克服しよう意識している部分である。すなわち、主体の統一を妨げるものの存在を意識し、それを乗り越えようとする要請があらわれたとき、その要請を問題というのである。そしてその要請に答え、要請を充足することが、問題解決の解決である。したがって問題の解決は、主体の統一を求める傾向を強化し、認識の統一すなわち理解を成立させるのである。⁽⁴⁾

B:しかし社会科はいうまでもなく社会をよりよき方向へと動的に一方を固定させずに一押し進めるものであり、そのためにのみ知識の働きを期待するのである。換言すれば社会に対する知識理解は、社会をよりよくせんとする努力のうちにおいてのみ、正しく(正しく働きうるように)形成されるのである。⁽⁵⁾

C:(知識は:引用者注)二つの相対性をもつことが必要である。すなわちそれをもつ者の個性的統一の体制に即するという意味での相対性と、知識がつねに自己否定的に発展しつづけねばならぬという意味での相対性である。⁽⁶⁾

上記A～Cについては、後述の「3 分析対象授業における自己調整力の高まり」のなかで説明したい。

2 分析対象授業の概要

- (1) 日時:2021年10月1日(金)
- (2) 授業者:西川恭矢先生
- (3) 対象:附属小学校5B
- (4) 単元:「海とつながる人々の暮らし」～持続可能な漁業をめざして～
- (5) 実践の概要

単元の概要については、西倉実季研究代表「主権者教育のカリキュラム・マネジメントに関する研究—持続可能な社会の担い手育成(ESD)との関連を念頭に—」(本共同研究報告書所収)に記載された、附属小学校

からの報告を参照されたい。また、本時目標、展開を次ページに示す。

3 分析対象授業における自己調整力の高まり

(1) 社会的事象と出会い、学習問題(問い)を設定する場面

本時では、「和歌山の漁業を守り続けるために大切なことを考えよう」というテーマに対し、それぞれが調べてきたことをもとに、意見を出し合うところから始まった。(以下のプロトコルで、Cの次のアルファベットは児童、数字は発言順を示す)

【場面①】事実との出会い

T2:そもそも、海の環境は悪くなっているの？

CA3:今は海洋プラスチック、プラごみが多くなっている。消化できないので人体にも溜まる。

CB4:ごみの量がものすごく増えている。30年後には魚の量よりもごみの量の方が増えると予測されている。

CC5:世界全体のプラごみの量は、年間で800万トン。

CB6:なんで捨てるんやろ？ 悪いとわかっているのに…。

CD7:ごみを捨ててはいけないとみんなわかっているけど、行動している人は少ない。今までの対策ではだめ。

【場面②】人を介した事実との出会い

T8:(栽培漁業センターの)中村さんは環境問題について、何と言っていた？

CE9:この問題は、自分たちとつながっている。お魚を買うだけではなく…。環境問題は自分たちが起こしているから、自分たちが戻さないといけない。

T10:でも、自分たちの生活は豊かになっている。

CF11:人間が建物をつくるということは、人間が嬉しくなるということやん。でも、魚は、人間が山を削って悲しむから…。

【場面③】消費者の減少という問題との出会い

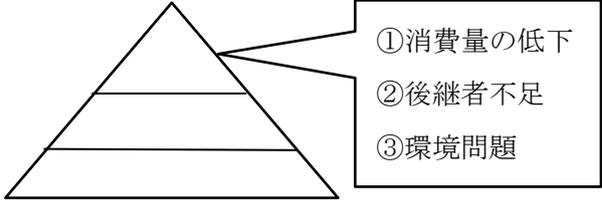
CG26:漁業協同組合に電話をかけてきて、若い人が食べなくなっている(魚の消費量が)減っている。それはわかるやん。売れやんくなってきてる。だから、消費量の減少がいちばん進んできてるっていうか、深刻。

【場面①】～【場面③】に示したように、社会的事象と出会い学習問題(問い)を設定する場面では、これまで

4. 本時の目標

既習事項や各種資料を活用しながら、それぞれがもつ考えを伝え合う活動をとおして、和歌山の漁業を守り続けていくために自分はどう行動すればよいのかについて考えを深める。

5. 本時の展開

学習活動と予想される子どもの反応	留意点・評価
<p>☆ 学習問題 和歌山の漁業を守り続けるために大切なことを考えよう</p>	
<p>1. 学習問題に対する考えを伝え合う (＊グループ活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1位はやっぱり海の環境を守ることが大切だ と思う。環境が悪くないとそもそも獲る魚が 育たなくなってしまう。 ・後継者不足を解決することが大切だと思 う。加美さんは技術を取得するために15年 はかかると言っていた。そのことを考えると 後継者を育てるのにも時間がかかるから早 くしないと手遅れになってしまう。(等) <p>2. 5Bプロジェクトとして何を大切にす かを決める (＊全体)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私は、〇〇さんとの話で意見が変わって、 まずは日本人の魚離れを止めなくてはな らないと思う。魚が売れないということは、 漁師さんの収入が上がらないから、いく らやる気があっても漁業ができないと思 う。 ・人の便利さが自然を壊しているから生 き物の暮らしやすさも考えていく必要があ る。 ・どの問題も大切で、結局、漁師さん だけでなく自分たちが主人公となって行 動する必要があると思う。 <p>3. 学習の振り返りを書く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・守り続けていくためには、自分たちの 問題として考えていくことが大切だと思 った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思考ツール(ランキングシート)を活用し、 自分の考えを表現させる。 ＊ロイロでは、ピラミットチャートで代 用する。  <ul style="list-style-type: none"> ・グループについては、ランキングシート を根拠としながら、子どもに自由に選 択させる。 ・グループ学習をとおして、考えが変容 した場合は、誰のどの意見で考えが変 容したかについても併せて発表させる。 ・構造的な板書によって、子どもたち の意見を整理する。 <p>思既習事項や各種資料を活用しながら、 それぞれがもつ考えを伝え合う活動 とおして、和歌山の漁業を守り続け ていくために自分はどう行動すればよ いのかについて考えを深めている。 (観察・ノート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習問題に対する考えを書き、単元 をとおして自分の学びがどのように深 まったかについてリフレクションさせ せる。

の学習を通して調べたことや出会った人々から得た情報をもとに、問題提起がなされた。しかし、ここでの「問題」の質は、まったく同じではない。

「環境問題は自分たちが起こしているから、自分たちが戻さないといけない」(C(KR)9)、「若い人が食べなくなっている(魚の消費量が)減っている。それはわかるやん。(中略:引用者)だから、消費量の減少がいちばん進んできてるっていうか、深刻」(C(SY)26)という問題は、漁業の存続が難しくなっているという社会的な問題に対し、自分もその問題を引き起こしている側の一員であるという自覚に基づいており、その意味で「自分ごと」の問題となっている。

このような自覚の涵養には、栽培漁業センターや漁業協同組合の方との出会いが大きな役割を果たしている。上記Bの引用にあるように、問題解決学習においては、「社会に対する知識理解は、社会をよりよくせんとする努力のうちにおいてのみ、正しく(正しく働きうように)形成される」ものと考えられている。本時のテーマが「和歌山の漁業を守り続けるために大切なことを考えよう」とあるように、子どもたちは本時の始まりの段階から、「漁業を守り続ける」(社会をよりよくする)ために学習に取り組んでいる。しかし、それが、「ごみを捨ててはいけないとみんなわかっているけど、行動している人は少ない」(C7)という認識に止まっている限り、「社会をよりよくせんとする努力」(下線:筆者)にはつながりにくい。人との出会いが、問題を自分ごとにするとともに、子どもたちの問題解決の主体としての自覚を育てていると言えよう。

(2) 調べたことをもとに計画を立てる場面

【場面④】問題を追究する主体の不統一の表明

T35:だから、TTさんはどう思うん？ さっき、オレ会社つくったら、金だけの会社にするって言ってなかった？ 環境は？

CH36:オレら、社会人になったら、こんなこと考えてられやんから…。

C37:騒然となる。

(中略:引用者)

T41:じゃあ、それ聞こうよ。これプロジェクトたててやっってるけど、きれいごとなん？

【場面⑤】外界に働きかけるなかでの抵抗についての話し合い

CB46:岸田さんに環境問題何とかしてくださいと言っても、市民の人が守らんかったらどうもならん。

CI47:偉い人に言っても、動くには数人だけやん？ だから、市民に言っても、どうでもいいという人もおるかもしれやんから、一部の人しか動かんかったらあんまり意味がない。

(中略:引用者)

CJ55:きれいごとじゃない。みんなが努力すれば、漁業は厳しくなるかもしれない。だから、きれいごとじゃない。

CK56:きれいごとじゃない。(図書館にあった『2040年の日本』という本にある未来の科学技術についての紹介)だから、このプロジェクトをやる意味がある。

【場面④】、【場面⑤】では、『『漁業を守る』プロジェクトに意味はあるのか?』というテーマで話し合いがなされている。ここで問題になるのが、上記Cにある「(知識の)个性的統一」という概念である。社会科教育研究では、社会についての知行合一、「わかっているけどできない」状態が常に問題とされてきた。C(TT)36にある「社会人になったら、こんなこと考えてられやん」というのは、その正直な表明である。子どもたちは、上記Aにあるように、「外界に働きかけてこれを変化させようとする」(和歌山の漁業を守ろうとする)なかで、「主体自身が抵抗(自分自身のなかにある不統一の存在と、自分たちが働きかけても外界を大きく動かすことはできないという実際)を感じ、これを克服しよう」としながら、問題を深めている。

このような学びを可能にしているのは、「さっき、オレ会社つくったら、金だけの会社にするって言ってなかった?」(T35)、「じゃあ、それ聞こうよ。これプロジェクトたててやっってるけど、きれいごとなん?」(T41)などに現れている、子どもたちが日常生活のなかで培ってきた社会認識を授業の場で検討の対象とする教師の「出」であると言えよう。「オレら、社会人になったら、こんなこと考えてられやん」(CH41)に見られる、学校で学ぶ知識を学校でのみ役立つものとみなす考えは、児童Hだけでなく、多くの子どもに共有されているものと考えられる。(だからこそ、C37で教室が騒然となったのだろう)。そのような子どもの現実を看過したまま「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」などの資質・能力

を掲げて学びを構成したとしても、子どもたちにとっては「きれいごと」に過ぎない。「いうまでもなく社会をよりよき方向へと動的に一方を固定させずに一押し進めるものであり、そのためにのみ知識の働きを期待するのである」(上記B)と掲げながらも、現実の社会科は、社会の自明化⁽⁸⁾のなかで、現実の社会に適応する(社会をよくするため、ではなく)ために知識を働かせていくための学びになってしまっているのが現実ではないだろうか。

上記の問題意識から、社会科教育学では、新たな社会秩序を模索する市民社会科⁽⁹⁾が提案されてはいるが、理論と実践に乖離があるのが実情である。子どもたちが、日常生活のなかで培ってきた自分の常識を、授業のなかで検討するという本授業の「しかけ」が示唆するものは大きい。

4 まとめに代えて

「社会科授業において子どもが自己調整を行う場面を生む『しかけ』として、「人との出会い」と「子どもたちが日常生活のなかで培ってきた常識を検討すること」の2つを指摘してきた。ここでは、まとめに代えて、「和歌山の漁業を守り続けるために大切なことを考えよう」という授業のテーマについて考えてみたい。

自己調整学習理論で引用されることの多い Zimmerman は、自己調整学習を支えている重要な3要素として「自己調整学習方略」「自己効力感」「目標への関与」を挙げているが、ここでの「目標」は、「成績、社会的尊敬、卒業後の就職の機会」などである⁽¹⁰⁾。一方、この実践の子どもたちは、成績や社会的な尊敬などの自己の利益のために学習に取り組んでいるわけではない。本稿では詳しく触れることはできなかったが、子どもたちを動かしているのは、「50年後に(漁業が)なくなるというのは絶対だめだと思って。なくなったら、次に漁業という仕事がよくなるまでにめっちゃ長い時間がかかる。復活したときには、海に魚がおるということも知らないかもしれないし、漁業という仕事がなくなるということは、漁師さんにとって傷になる」(CB52)という発言に見られるように、漁業という仕事に誇りをもつ漁師さんへの出合いや将来世代への責任である。しかしながら、子どもたちのこのような学習への構えを引き出しているのは、「和歌山の漁業を守り続けるために大切なことを考えよう」という授業のテーマであると言えよう。今ある社会を

最善のものとし、そこに適応していくための学びではなく、よりよい社会を仲間とともにつくっていくための学びという学びの位置づけが、子どもたちの探究を深めていることも指摘しておきたい。

- (1) 和歌山大学教育学部附属小学校「2021 学校提案」『2021秋の教育研究発表会』当日資料
- (2) 和歌山大学教育学部附属小学校「教科等提案社会科」『2021秋の教育研究発表会』当日資料
- (3) 上田薫『知られざる教育 抽象への抵抗』黎明書房、1958、p.50
- (4) 重松鷹泰『教育方法論Ⅱ 教育科学』明治図書、1975、pp.35-36
- (5) 上田薫、前掲書、pp.35-36
- (6) 上田薫、前掲書、p.106
- (7) 和歌山大学教育学部附属小学校「教科等提案社会科」『2021秋の教育研究発表会』当日資料
- (8) 渡部竜也「社会問題提起力育成をめざした社会科授業の構想—米国急進派教育論の批判的検討を通して—」全国社会科教育学会『社会科研究』第69号、2008、pp.1-10
- (9) 池野範男「市民社会科歴史教育の授業構成」全国社会科教育学会『社会科研究』第64号、2006、pp.51-60
- (10) Barry J. Zimmerman, A Social Cognitive View of Self-Regulated Academic Learning, the American Psychological Association, *Journal of Educational Psychology* 1989, Vol. 81, No. 3, 329-339, p.329